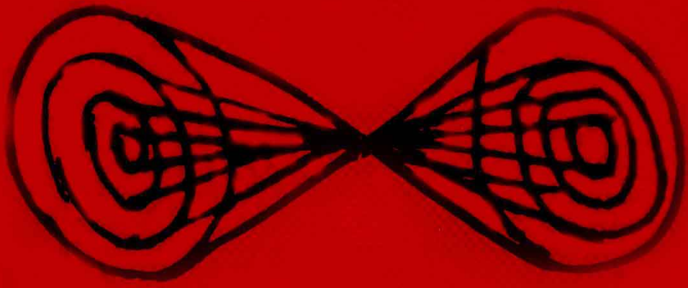


ゲルツェン★

過去と思索 I

金子幸彦訳

世界文學大系

82

筑摩書房版

世界文学大系 *82*

ゲルツェン ★

世界文学大系

昭和39年 2 月24日発行

定価600円

訳　者　金子幸彦
発行者　古田晁
印刷者　山元正宜
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区
振替東京　4123

目次

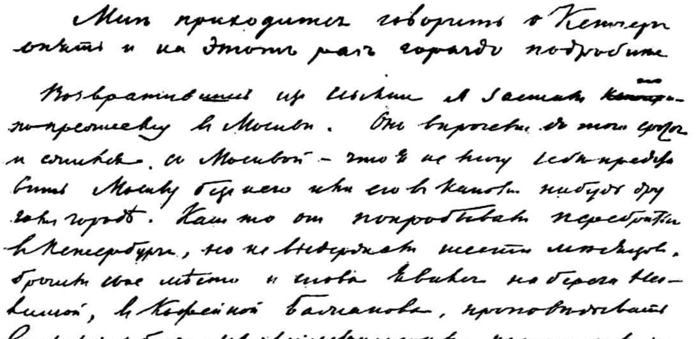
過去と思索　金子幸彦訳　5
まえがき　5
ロシヤの同胞に　8
第一部（一八一二―三四）　10
第二部（一八三四―三八）　112
第三部（一八三八―三九）　201
第四部（一八四〇―四七）　259
付録　426
事項注　428
人名注　434
アレクサンドル・ゲルツェン　I・バーリン　萩原直訳　449
解説　金子幸彦　456
年譜　460

装幀　庫田　叕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ゲルツェン

★


Мне приходится говорить о Кетчере опять и на этот раз гораздо подробнее.

Возвратившись из ссылки, я застал по-прежнему в Москве. Он вырос до того сросся и сжился с Москвой — что я не могу себе представить Москву без него или его в каком-нибудь другом городе. Как-то он попробовал перебраться в Петербург, но не выдержал шести месяцев, бросил свое место и снова явился на берега Неглинной, в Кофейной Бажанова, проповедовать вольный образ мыслей офицерам, играющим на биллиард, поучать актеров драматическому искусству, переводить Шекспира и любить до притеснения прежних друзей своих. Правда, теперь у него были и новые друзья

ゲルツェンの筆蹟

過去と思索

Н・П・オガリョーフにささげる

この書のなかでは、なによりも多く、ふたりの人物について語られている。そのひとり[1]はすでにこの世にいない。君はまだ生きのこっている。それゆえ、友よ、この書は当然君に属する。

イスカンデル

一八六〇年七月一日
Eagle's Nest Bournemouth.

まえがき

かねてから友人たちの多くは、『過去と思索』の完全な出版をはじめるように、わたしにすすめていた。これには、少なくとも第一部と第二部とについては、困難はない。しかし彼らは、『北極星』[1]誌にのった断章がラプソディクで、統一がなく、不意に中絶し、ときに先走り、ときに停滞したりしていると言う。わたしもそのとおりだということは感ずる。だが訂正することはできない。追補を加え、各章を年代順におきなおすこと——これはむつかしいことではない。しかしすべてをd'un jet（一気に）書きなおすことはわたしはしたくない。

『過去と思索』はつづけて書いたものではない。ある章とある章とのあいだには、幾年もの歳月がよこたわっている。このゆえに全巻にわたって、それぞれの時代とさまざまな気分との陰影が刻（きざ）まれている——わたしはこれを消し去ってしまいたくはない。

これは手記というよりは、むしろ告白であり、この告白をめぐって、またこの告白を機縁として、ここかしこにひき出された、過去のなかからの思い出と、ここかしこにとらえられた、思索のなかからの思想とがあつめられている。けれどもこれらの翼舎、上屋、傍屋も、全体としてみれば、そこに統一があるはずである。少なくともわたしにはそう思われる。

これらの手記は——はじめての試みではない。わたしが一種の思い出のようなものを書きはじめたのは、二十五歳のころであった。それは次のような事情からである。ギャトカからヴラヂーミルに移されて、わたしはひどくたいくつしていた。モスクワのすぐ手前にとどまっていることは、わたしをいら立たせ、わたしの心を傷つけた。わたしはあたかも、旅程の最後の駅で、馬がなくて、むなしくとどまっている旅人のような立場にあった！

実際は、これは「すぎ去りつつあった青年時代の、もっとも純粋な、もっともまじめな時期」＊とさえも言えるころであった。

＊『牢獄と流刑』参照。

そしてそのころわたしはたいくつしていたといっても、それは子供たちが祭日や誕生日の前夜に感ずるような、あかるい、幸福なたいくつであった。毎日わたしの手もとには、こまかい文字で書きつづられた手紙[2]が送られてきた。わたしはそれらを誇りとし、それらによって幸福であった。わたしはそれらによって成長した。それにもかかわらず、別離はわたしを苦しめた。わたしはこの永久とも思われたところの——実際は四ヵ月ほどの期間[3]を、なるべく早くすごすためには、何をしたらよいかを知らなかった……。わたしはあたえられた忠告にしたがって、クルーチッツィについての、ギャトカについての、わたしの思い出をひまにまかせて書きはじめた。三冊のノートを書きつづった……そののち過去のことは現在の光のなかに消えてしまった。

一八四〇年にベリンスキイがそれを通読した。それは彼の気にいった。そこで彼はそれらのノートのうちの二冊（第一冊と第三冊）を『祖国雑記』[4]誌にのせた。のこりの一冊は、もしたきつけにされてしまわなかったとすれば、今でもモスクワのわたしの家のどこかに、なげこまれてあるにちがいない[5]。

それから十五年がすぎた。「わたしはロンドンの郊外、プリムローズ・ヒルのちかくに、と

おいへだたりと霧と、そして自分の意志とによって、世間から切り離されて住んでいた。

ロンドンでは、わたしに親しい、ひとりの人間もいなかった。わたしが尊敬し、またわたしを尊敬してくれた人々はいた。けれども親しい人はひとりとしていなかった。ちかづき来たり、遠ざかり行き、めぐり会ったすべての人々はおなじ共通の利害、全人類の事業、少なくとも全国民の事業にたずさわっていた。彼らとの交わりはいわば個性のない交わりであった。数ヵ月がすぎて行った――しかしそのあいだ、話したいと思われた問題については、一言もふれられることがなかった。

……とかくするうちに、わたしは、うちつづいた、多くのおそろしい出来事、不幸、過失ののちに(6)、ようやくわれに返り、元気をとりもどしはじめていた。わたしはおのれの生涯の、最近の数年の歴史を、ますますはっきりと、思いうかべるようになった。そしてわたしは、わたしよりほかのだれもこの歴史を知らず、わたしの死とともに真実もまた死ぬであろう、ということに気づいて、恐怖をおぼえたのである。

わたしは書くことに心をきめた。しかし一つの思い出は数百のほかの思い出をよびおこすのであった。すべての古きもの、なかば忘れられたものがよみがえってきた。少年の日の空想、青年時代の希望、青春の血気、牢獄と流刑――心になんの悲しみをものこさず、その打撃によって若い生命を新鮮にし、強固にしつつ、春の雷雨のごとくにすぎ去って行った、これらの若き日のかずかずの不幸。*」

* 『牢獄と流刑』への、一八五四年の序文。

今度はわたしは時をかせぐために書くのではない――どこにも、いそいで行くところはなかったのである。

わたしがこのあたらしい仕事にとりかかろうとしていたころ、わたしは自分の『一青年の手記』(7)の存在についてはまったく思い出すこともなかったのであるが、あるとき British Museum でロシヤの雑誌をあれこれとひもといていたおりに、ゆくりなくもこれを見つけた。わたしはひとにこれを書きうつしてもらって、読みかえした。読みかえしたうえの感じは奇妙なものであった。わたしは自分が、この十五年のあいだに、いかに年老いたかを身にしみて感じた。はじめのうちこの感情がわたしの心をはげしくゆり動かした。わたしはそのころはまだ生活を、そして幸福そのものをも、あたかもそれが終わりのないものであるかのごとくに、もてあそんでいた。『一青年の手記』の調子は、わたしがその書から何物をも取り出すことができなかったほど、まちまちなものであった。この手記は若い時代に属しているものであり、それ自身として残らなければならない。それがもつ朝の光はわたしの夕暮れの労作にはふさわしくない。そのなかには多くの真実なものがある。だがいたずら気もまた多い。しかもわたしがギャトカにおいて読みふけったハイネの、わたしにはよくわかる痕跡がのこっている。『過去と思索』においては、生活の痕跡が見られるだけであって、それよりほかの、なんの痕跡も見られない。

わたしの仕事はゆっくりと進行した……ある過去の出来事が、なぐさめがたい、悲しい、しかし理解によって和解をあたえてくれるような、透明な思索にまで純化するには、多くの時が必要であった。これなしにも誠実さはありうるだろう。しかし真実さはありえないのだ！

わたしのいくつかの試みは失敗した――わたしはそれらをすてた(8)。ついに今年の夏、わかいころの友人のひとりにわたしの最後の数冊のノートを読みきかせていたとき、わたしはみずから見知りのなつかしい輪郭をみとめた。そしてやめた……こうしてわたしの著作は完了した！

わたしがこの著作を重視しすぎているということ、またこれらの、かすかにみとめられる輪郭のなかには、わたしひとりにとってのみ意味のあることが、たくさんしまいこまれてあるのだ、ということはきわめてありうることだ。またわたし自身はこの書のなかに、実際に書かれてあることよりも、はるかに多くのことを読みとっているのかもしれない――のべられた諸事実はわたしのなかにかずかずの夢をよびさます。それはまたわたしのみが解読のかぎをもつ象形文字でもある。わたしのみがこれらの行間に息づく魂の鼓動を聞くのであろう……。そうかもしれない。しかしそのためにこの書が、わたし

にとって、貴重なものでなくなるということはない。この書は、ながいあいだわたしにとって、人々の、また失われたるもののつぐないとなってくれた。しかしこの書ともわかれなければならない時がきた。

　すべての個人的なるものはすみやかに崩れてゆく。この衰頽には服従しなければならない。これは絶望ではない。老衰ではない。無情でもなく、また無関心でもない。これは――白髪の青春であり、回復の一形式であり、あるいはむしろ回復の過程そのものである。ある傷を人間的にたえるのは、この方法によってのみ可能である。

　修道僧のうちには、彼がいかなる年齢の者であっても、つねに老人と青年とが同時に存在する。彼はすべての個人的なるものを葬り去ることによって、青春に帰ったのである。彼の心はかるく、ひろびろとしてくる……ときにはあまりにひろびろとしてくる……。まことに人間はときとして、個性のない普遍性のあいだで、歴史的自然性のあいだで、またそれらの表面を雲の影のごとくにとおりすぎる、未来の形象のあいだで、空虚な、また孤独な感じにとらわれることがある。しかしそれがなんであろう？　人人はすべてのものを保持したく思う。ばらをも雪をも。彼らはぶどうの熟した房のまわりに五月の花の咲きみだれることを望むであろう！　修道僧たちは祈りによって不満のつぶやきから救われたものである。われわれは祈りをもたない。われわれのところにあるものは仕事である。仕事が――われわれの祈りである。祈りも仕事もむすぶ果実はおなじであるかもしれない。しかし今はこのことを語るのではない。

　たしかに生活のなかには復帰するリズムへの、モティーフの反復への偏愛がある。老年期がいかに幼年期に似ているかを知らない者があろうか？　よく観察すれば、人生には、そのもっともさかんな時期をさかいとして、その両側に、一方には花の冠があり、他方には茨の冠があり、一方にはゆりかごがあり、他方には柩のある、たがいに相似た特徴をもった、二つの時代がしばしばくり返されることを見るであろう。青年時代がまだもたなかったものはすでに失われてしまった。青年時代に個人的考慮なしに空想したところのものは、ひときわあかるく、ひときわ静かに、そしてやはり個人的考慮なしに、雨雲と空焼けのかなたから現われてくる。

　……われわれふたりが五十歳にちかい今日になって、ロシヤの自由なることばの最初の印刷機のまえに立っていることを思うとき、わたしにはあの雀ガ丘（ヴォロビョーヴィ・ゴールイ）での、われらの子供らしきグリュートリの誓い(9)が三十三年まえのことではなく、せいぜい三年まえのこととしか思われないのである！

　生活……多くの生活、多くの民族、多くの革命、きわめて愛すべき人たちが、雀ガ丘とプリムローズ・ヒルとのあいだに、立ち現われ、いれかわり、消えて行った。それらの痕跡は、諸事件の無慈悲なる旋風のために、もはやほとんど消し去られた。まわりのすべてのものが変わった。テームズ川がモスクワ川に代わって流れる。そして異国の民がわたしをとりまく……われわれには、もはや祖国への道はない……。十三歳と十一歳との、ふたりの少年の空想のみが、そこなわれずに、のこったのである！

『過去と思索』をして個人的生活の決算書となり、これが索引とならしめよ。のこりの思索は――仕事へ、のこりの力は――たたかいへ。

わが盟約はかわらずのこる。
われらのみまた夜道をたどる。
たゆまず真理を語りつつ
あまたの夢や人々をして
われらがかたえを過ぎ行かしめよ(10)！

ロシヤの同胞に(1)

これらの文章の行の下には、死よりもさきにおわった四十年の生活の塵が沈んでいる。同胞よ、平安とともにこの生活の思い出をうけいれよ。

わたしをとりまいていた、そしてわたしによって呼び起こされた驚きと不安とが、ついにしずまろうとしている。わたしのまわりには人々が減ってゆく。われわれはたがいにちがった道をたどるのであるから、わたしはますますひとりぼっちになる。

わたしはロンドンから出ない。どこへもゆくところはないし、ゆく用事もない……。わたしとわたしに親しいすべてのものとを、かくも無慈悲にうちくだき、ひきまわしたところの波濤によって、ここへおしつけられ、なげ出されたのである……。ここにしばしとどまろう。息をつき、いくらかでも自分をとりもどすために。

わたしの生涯の最近の幾年かのおそるべき歴史を、あなたがたに物語るために、この時を利用することは、わたしにできるであろうか、間に合うであろうか？　わたしは知らない。しかし試みてみよう。

この時についての一語一語は、埋葬の鐘のまばらな、おもくるしいひびきのように、心をおもくゆり動かし、またしめつけるのである。けれどもわたしはそれについて語りたいと思う。だがそのものから、わたしの過去から、のがれるためにでもなく、それとわかれるためにでもない——いな、地上の何物をもってしても、わたしはそれをゆずらない。わたしには、それよりほかのものは、何もないのだ。わたしはおのれの、かずかずの苦難を祝福した。わたしはそれらと和解した。そして、もしも死がわたしのゆくてをよこぎらなかったならば(2)、わたしは勝利の意識をもって、ひとりぼっちではなしに、幾多の試煉のなかから出て行ったことであろう。

過去の限界のそとには、わたしは自分のもの、個人的なるものを、何一つもっていない。わたしは過去のなかに生きている。わたしは死によって、すぎ去ったものによって生きている——このように修道僧たちもまた、髪を刈りおとして、おのれの個性をうしない、過去の洞察によって、完了したものの説教によって、死者たちについての、彼らのあかるい復活についての祈りによって生きたのである。すぎ去ったものはわたしのなかに生きている。わたしはそれをつづける。わたしはそれをとじこめてしまうことを欲しない。わたしは語りたい、なぜならわたしだけが、それについて、証明することができるのであるから。

わたしの告白はわたしに必要である。それはあなたがたにも必要である。それはわたしのためには神聖なものであるところの、そしてあなたがたのためには親しいものであるところの思い出にとって必要である。それはわたしの子供たちにとって必要である。

なつかしい友人たちよ、わたしはあなたがたと一八四七年一月二十一日にわかれた(3)。

わたしはそのころ力にみちあふれていた。それに先立つ、わたしの生活はわたしに多くの保証と試煉とをあたえていたので、わたしは無謀な自負心と生活に対する不遜な確信とをもって、大胆にあなたがたから離れ去った。かたく団結し、たがいに近づき、ふかい愛情と共通の悲哀とによって結ばれた人々の、小さな一団のなかから、わたしは性急にぬけ出たのである。わたしをさそっていたものは、別の生活、とおいへだたり、ひろびろとした場所、公然たるたたかいと自由なる言論とであった。わたしの不安な精神は活動の舞台を、独立を求めた。ロシヤで一挙手一投足を拘束している、すべてのきずなをたち切って、わたしは自由におのれの力を試してみたかったのである。

わたしは求めたものを見いだした。そればかりではない。すべての幸福とすべての希望との破滅と喪失、片すみから加えられる打撃、悪賢い裏切り、何物にもためらわず、すべてのものに対して加えられる冒瀆、そしてあなたがたの考えもおよばないような道徳的頽廃……そういうものをもわたしは見いだしたのである。

十五年まえ、流刑地にいたとき、わたしの生涯のもっとも美しい、もっとも詩的な時代の一つ、一八三八年の冬か春のことであった。わた

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

しはわたしの最初の青春の思い出を、心もかるく、いきいきと、そしていたずら気分で書きつづった[4]。検閲でゆがめられた二つの断章が印刷された。のこりの部分は亡びた。わたしは、それが警察の手におちて、わたしの友人たちに迷惑をおよぼすことをおそれて、二度目の流刑のまえに、自分でその一部を焼きすてた。

それらの『手記』といまわたしの書いているこれらの行とのあいだには、まったき生活が経過し、完結した――それは幸福と不幸とのおそるべき豊富さをもった、二つの生活であった。そのころは、すべてが希望に息づき、すべてが前に向かってつき進んだ。今はただ思い出のみが、うしろへの回顧のみがある――前方への視線は生活の限界を越える。それは子供たちに向けられている。わたしはうしろ向きにゆく、さながらダンテの歌のなかの亡霊のように、頭をかしげて、

Il veder dinanzi era tolto.[5]
（前方を見ることはゆるされなかった）

十五年の歳月は、力を育てるためにも、またおどろくべき華麗さと豊富さとをもった、もっとも大胆な空想、もっとも実現しがたい希望を遂行するためにも、十分なものであった。そればかりではなく、またすべてのものを、……個人的なものをも、一般的なものをも、カルタで作った家のように、つきおとすことによって、これらの空想や希望をうちくだくためにも、それは十分であった。

『一青年の手記』をつづけることをわたしは欲しない。またかりに欲したとしても、できない。微笑と過度の気楽さとは、葬式の場にはふさわしくない。人々は、柩（ひつぎ）のおかれてある部屋のなかでは、その柩がおのれの知人のものでない場合でさえ、心ならずも声をひくめて、ふさぎこむものである。

A・ゲルツェン

一八五二年十一月二日　ロンドン

2. Barrow Hill Place, Primrose Road

第一部　子供部屋と大学

（一八一二—三四）

むかしの道を心にたどれば
すぎし日のすべての思いがよみがえる。
よろこび、うれいはむかしのままに
おなじ不安が心をとらえる。
またもや胸がしめつけられて
心そぞろにためいきをする。

H・オガリョーフ（『ユーモル』）

第一章

わたしの保母と la grande armée——モスクワの火事——ナポレオンのもとにおける、わたしの父——イロヴイスキイ将軍——フランスの捕虜たちとの旅行——愛国主義——K・カロー——所有地の共同管理——分配——セナートル（元老院議員）

——ねえ、ヹーラ・アルターモノヴナ、フランス人がモスクワへ攻めてきたときのことを、もう一度話してよ——わたしは、わたしが落ちないようにズックでまわりをぬいつけた小さな寝台の上で、からだをのばしながら、綿入れの夜具のなかにくるまって、話しかけるのであった。

——いけません！　なんの話です！　もうなんべんも聞いたでしょう？　もう寝る時間です。あした早く起きたほうがいいでしょ——老婆はたいていこう答える。だが彼女は自分でも大好きなこの話を、わたしが聞きたいのとおなじくらいに、くり返し語りたいのである。

——では少し話して。ねえ、どうしてわかったの、どういうふうにしてはじまったの？

——こうしてはじまったんです。あんたのお父さまはね、いつもぐずぐずして、物事を引きのばしているおかたです。出かけよう、出かけようと思ってて、今度こそはほんとうに出かける気になった！　みんなが、もう出かける時間です、何をまっているんです、町にはもう、だれものこっていないんですよって言っても、パーヹル・イヷーノヸッチ*と話してばかりいるんです。いっしょにゆく相談です。一方が仕度ができると、今度は片方が仕度ができていないというしまつで。でも、とうとうわたしたちは荷作りをしてしまって、馬車の仕度もできて、だんながたは朝食の席につきました。すると、いきなり、うちの料理番が、まっさおになってはいってきて、「敵がドラゴミーロフスカヤ関門に侵入しました」っていう知らせです。それでわたしたちはみんな、心臓がとまるほどおどろいて、神さまのお守りを祈りました。みんなすっかりあわててしまったんです。そして駆けまわったり、ため息をついたりしていましたが、見ると——りっぱなかぶとをかぶって、うしろに馬のしっぽをなびかせた竜騎兵たちが通りを駆けてゆきます。関門はみんなとざされてしまいました……。ですからあんたのお父さまは、どこへも行けなくなってしまいました。それにあんたを連れているし、そのころはまだあんたは乳母（うば）のダーリヤがだいて、乳をのませていたんです。とてもやせた、弱い赤ちゃんでしたよ。

* ゴロフワーストフ、わたしの父の妹の夫。（A・ゲルツェン）

そこでわたしは、自分が戦争に参加していたことに満足して、誇らしげにほほえむのであった。

——はじめのうちはまだよかったんです。はじめの幾日かのあいだはね。よく二、三人の兵隊がはいってきて、そして酒はないかって手まねできくので、ちゃんと一杯ずつグラスについで、そばへもってってやると、のんで帰ってゆきます。帰るときには、敬礼してゆきました。ところが火事がはじまって、だんだん大きくなって、すっかり混乱してしまって、掠奪（りゃくだつ）がはじまり、いろんなおそろしいことが起きてきました。わたしたちはそのころ公爵令嬢[1]のお家（うち）の傍屋に住んでいたんですが、その家もやけはじめたので、パーヹル・イヷーノヸッチが、「わたしのところへゆこう。わたしの家は石づくりで、庭のおくのほうにあるし、外壁もついている」と言うので、わたしたちはゆきました。だんながたも召使もみんないっしょで——そんなとき

は、ちっとも区別なんかありません。トヹーリ大通りに出ると、もう並木がもえはじめています。とうとうゴロフヴーストフさまのお屋敷まで来ました。ところがそれもさかんに燃えています。どの窓からも火がふき出ているんです。パーヹル・イヴーノヸッチは立ちすくんでしまいました。自分の目が信じられないみたいです。家のうしろに、ほら、大きなお庭があったでしょう。わたしたちはあそこへゆきました。あそこならだいじょうぶだと思ってね。がっかりしてベンチに腰かけていると、いきなりどこからともなく、とても酔っぱらった兵隊の一群が出てきて、そのうちのひとりがパーヹル・イヴーノヸッチのきている旅行用の毛皮外套をはぎとろうとして、とびかかりました。おじいさんはやろうとしません。兵隊は短剣をひきぬいて、あのかたの顔に斬りつけました。それであのかたには死ぬまで傷あとがのこったんです。ほかの兵隊たちはわたしたちのほうへやってきました。ひとりがあんたを乳母の手からもぎとって、おむつをひろげてみて、お札かダイヤモンドでもかくしてないかと探してましたが、何もないことがわかると、その悪者はわざとおむつをひきさいて、投げすてました。兵隊たちが行ってしまったと思うと、また災難がふりかかりました。うちにいた、兵隊に出されたプラトンという召使をおぼえているでしょう？　あれがとてもお酒が好きで、この日も一杯機嫌で、サーベルをさげたりして、歩きまわっていました。ラストープチン伯爵が、敵のはいってくる前の日に、武器庫の武器をすっかりみんなに分けたんで、それでプラトンまでがサーベルなんかさげていたんです。夕方になって、竜騎兵がひとり、馬にのってお屋敷のなかへはいってきたのをプラトンが見つけました。うまやのそばに、馬が一匹つないであったので、竜騎兵はこの馬をつれてゆこうとしたんです。ところがプラトンはまっしぐらに竜騎兵にとびかかって行って、たづなにしがみついて、「この馬はおいらのとこの馬だ。きさまなんかにやるもんか」って言いました。竜騎兵はピストルでもっておどかしましたが、それはたまがこめてなかったようでした。だんなさまも自分でこの様子を見ていて、プラトンにどなりました。「馬をほっとけ――余計なことをするな！」って。そんなことを言ったってききません。プラトンはサーベルをぬいて、いきなり竜騎兵の頭に斬りつけました。竜騎兵がよろめくところを、何度も何度も、めった斬りに斬りつけたんです。そこでわたしたちは、もう生きてはいられない、仲間の竜騎兵に見つかったら、命はないだろうと覚悟してました。プラトンは、竜騎兵が馬からおちると、両足をつかんで水門のところへ引きずっていって、なかへ投げこんでしまいました。かわいそうに、まだ生きていたんです。竜騎兵ののってきた馬は、立ったまま動こうともしないで、足で地面をひっかいて、すっかりわかっているような様子です。家の者たちがこの馬を、うまやのなかにとじこめてしまいましたが、きっとあそこで焼け死んでしまったでしょう。わたしたちはいそいで邸内から出ました。火事はますますひどくなってきます。何も食べないで、疲れきって、一軒の焼けのこった家にはいって休んでいると、一時間もたたないうちに、往来から、うちの下男たちが、「出てください。出てください。火がきました、火がきました！」って叫んでいます。そこでわたしはたまつき台の布片をはぎとって、それでもってあんたを、夜風があたらないように、包みました。それからやっとトヹーリ広場にたどりつくと、そこではフランス兵たちが火事を消そうとして働いていました。フランスの大将が県知事の家に泊まっていたからです。わたしたちはそうして、ただ通りに腰をおろしていました。歩哨がそこいらじゅうを歩きまわっているし、馬にのった兵隊もたくさん行ったり来たりしてます。ところがあんたは泣く。すっかり疲れているのに、乳母は乳が出なくなってしまうし、だれもパンのひときれももっていません。わたしたちといっしょに、そのときナターリヤ・コンスタンチーノヴナもいました。知っているでしょう？　しっかりしたむすめでした。兵隊たちがすみのほうで何かたべているのを見て、あのむすめはあんたをだきとって、まっすぐ兵隊たちのところへ行って、あんたを見せながら、「赤ん坊にマンジェ（manger 食べるの意）」とか言ってました。兵隊たちは、はじめこわい顔をしてじろじろ見て、「ア

レー、アレー（allez 行けの意）って言います。ナターリヤは兵隊たちをののしって、おまえさんたちはなんていうろくでなしなんだろうね、とかいろんなことを言っていました。兵隊たちはひとこともわからないんですが、でも急に笑い出して、水に漬けたパンをあんたのために渡してくれて、ナターリヤにも、かたい上皮を一片（ひときれ）くれました。朝早くひとりの士官がやってきて、男の人たちをみんな、あんたのお父さままでつれて行ってしまって、のこったのは女たちと、けがしていたパーヹル・イヷーノギッチだけです。みんな近所の火事を消すためにつれてゆかれたのです。それで晩までわたしたちだけで、すわって泣いてばかりいました。薄暗くなって、だんなさまがおもどりになりましたが、ひとりの士官がいっしょにきました……。

　これから先はわたしが、老婆に代わって、その話をつづけることを許していただきたい。わたしの父は命ぜられた消防隊長の役目をはたしたとき、ストラストノイ修道院のそばで、イタリヤ騎兵中隊に出会い、その隊長のまえに行って、イタリヤ語で、家族のおかれている状態を話した。そのイタリヤ人は la sua dolce favella（快き母国語）を聞いて、父に対し、トレギズ公と話してくれること、それからゴロフヷーストフ家の庭で起きたような、野蛮な事件を防止するために、あらかじめ歩哨をつけてくれることを約束した。彼はひとりの士官にこの命令をあたえて、わたしの父と同道させた。その士官は、一同がまえの日から何も食べていないことを聞いて、みんなを一軒の破壊された食料品店に案内してくれた。なかへはいると、新茶やルヷント産のコーヒーが、たくさんの椰子（やし）の実や、乾いちじくや、はたんきょうの実などとともに、床の上になげ出されてあった。下男たちはこれらのものを、めいめいポケットにいっぱいつめこんだ。デザートに不足はなかった。歩哨になってくれた士官はたいへん役に立った。というのは、トヹーリ広場のかたすみで野宿しようとした、この不幸な女中や下男の一群に、兵士たちが十回も文句をつけにきたが、その都度（つど）彼の命令で退散したからである。

　モルティエは、わたしの父にパリで会ったことのあるのを思い出して、このことをナポレオンに上申した。ナポレオンはわたしの父をあくる朝つれてくるように命じた。狩猟のときに着ることになっていた、青銅ボタンのついた、藍（あい）色の、着古した半燕尾服に、よごれた下着を着て、かつらもかぶらず、数日のあいだみがかない靴をはき、ひげもそらずに、わたしの父――身だしなみときわめて厳格なエチケットとの信奉者――はフランス人たちの皇帝のお召しにより、クレムリ宮のご座所にまかり出た。

　そのときの彼らの会話については、わたしは何度も聞かされたものであるが、フェン男爵の記録とミハイロフスキイ・ダニレフスキイの歴史のなかに、かなり正確につたえられている。

　ありきたりの文句、断片的なことば、そして、その意味が非常にしばしば平凡なものであったことに人々が気づくまで、三十五年ばかりのあいだ、深遠な意味をあたえられてきたところの、かの簡潔な警句ののちに――ナポレオンは火事のことでラストープチンをさんざんののしり、これはヷンダリズムであると語り、例によって、平和に対する自分のうちかちがたい愛情を確言し、彼の戦争はイギリスにおいてこそ行なわれるべきであって、ロシヤにおいてではなかったということを説明した。また養育院とウスペンスキイ大寺院とに衛兵をつけたことを自慢し、アレクサンドル皇帝への苦情をのべ、皇帝は悪い臣下にとりまかれていて、ナポレオンの平和的意向を知らされていないのだと語った。

　わたしの父は、講和を提議するのは、むしろ勝利者のすべきことであるとのべた。

　――予はできるかぎりのことをした。予はクトゥーゾフにあて再三使者を派遣した。彼はいかなる交渉にも応じようとせず、また予の提案を皇帝につたえることもしない。彼らは戦争を欲している。これは予の罪ではない。彼らは戦争をつづけることになるであろう。

　この喜劇がすべておわってから、わたしの父は彼にモスクワから出るための通行許可証の下付を願った。

　――予は旅行許可証をだれにもあたえぬように命じた！　貴下はなぜ行くのですか？　何をおそれておられるのか？　予は市場をひらくことを命じた。

フランス人たちの皇帝は、このとき、開かれた市場のほかに、屋根のある家をもつこともさしつかえはないはずだということ、そしてトヴェーリ広場における、敵の兵隊のあいだでの生活は、かならずしも、もっとも快適なものとは言えないのだということを忘れたようであった。

わたしの父はこのことを彼に指摘した。ナポレオンはしばらく考えていたが、急にたずねた。

——貴下は予の手紙を皇帝にとどけることをひきうけてくれますか？　この条件で予は貴下と家の者すべての通行許可証をあたえるように命じよう。

——わたしは陛下のおことばにあまえたいのでありますが——とわたしの父は彼に言った——しかし保証申し上げることは困難であります。

——貴下は、自分で手紙をとどけるために、全力をつくすことを誓われるか？

——Je m'engage sur mon honneur, Sire.（名誉にかけてお誓い申します、陛下）

——それで十分です。いずれあらためて貴下をお迎えにやるが、何か入用なものがあれば、申しなさい。

——わたしがここにいるあいだ、わたしの家族のための家がほしいのであります。それ以上は何もいりませぬ。

——トレギズ公ができるだけのことをするであろう。

モルティエは事実総督邸の一室をあたえ、またわたしたちに食料品を給するように命じた。彼の給仕長はぶどう酒をさえ送ってよこした。

こうして幾日かがすぎたある朝の四時に、モルティエはひとりの副官をよこして、わたしの父をクレムリにゆかせた。

そのころ火事はおそるべき範囲にひろがって、灼熱（しゃくねつ）した空気は煙のためににごり、その暑さはたえがたいほどになっていた。ナポレオンはすでに服装をととのえ、気づかわしげに、いら立ちながら、部屋のなかを行き来していた。彼は、その焼けこげた月桂冠がやがて凍りつくであろうということ、そしてここでは事態はエヂプトにおけるごとき冗談ではすまないであろうということを感じはじめていた。この戦争の計画はばかげたものであった。このことはナポレオンをのぞくすべての者が、ネイ、ナルボン、ベルティエ、そして一般の士官たちまでが知っていた。すべての異議に対し、彼はただ、「モスクワ」という、神秘的な一語をもって答えた。モスクワにきて、彼もまた気がついたのである。

わたしの父がはいってゆくと、ナポレオンは机の上の、封印した手紙をとりあげ、これを彼に渡し、答礼をしながら言った。「予は貴下の約束を信頼する。」封筒の上には《A mon frère l'Empereur Alexandre》（わが兄弟なるアレクサンドル皇帝に）と書かれてあった。

わたしの父にあたえられた通行許可証はいまでも保存してあるが、それはトレギズ公によって署名され、下の部分にモスクワ警視総監レセプスの認証が記入してある。いくたりかの見知らぬ人たちが、父の通行許可証のことを聞きこみ、召使または親戚の者ということにして、同道してくれるように頼んで、わたしたちの一行に加わった。病気の老人とわたしの母と乳母とのために、大型の無蓋（むがい）馬車が提供された。そのほかの者は徒歩で出かけた。数名の槍騎兵が騎馬で、ロシヤ軍の後陣まで、わたしたちを護衛してくれた。後陣の見える地点までくると、彼らは「道中ご無事に」とのことばをのこして、馬首をめぐらして駆け去った。一分後にはカザーク兵たちが、奇怪な脱出者の一団をとりまき、後陣の本営につれて行った。本営ではギンツェンゲローデとイロヴァイスキイ四世とが指揮にあたっていた。

ギンツェンゲローデは手紙の話を聞いて、父に対し、彼を二名の竜騎兵とともにただちに、ペテルブルクの皇帝のもとに、出立させる旨をつげた。

——あなたのご家族はどうしましょう？——とカザークの将軍イロヴァイスキイがたずねた——ここにとどまっていることはできません。ここにいたんでは、銃弾の射程内にいることになります。いつどんな重大なことが起きないともかぎりません。

わたしの父は、もしできるなら、わたしたちをヤロスラーヴリの彼の所有地まで送りとどけてもらいたいとのべ、ただし手もとには一コペイカの金ももち合わせがないことをつげた。

——それはあとで清算することにして——と

イロヴイスキイは言った——とにかくご安心ください。ご家族をおとどけすることを約束します。

父は伝令用の馬車にのせられて、そのころの、粗朶(そだ)をしいた道を、ペテルブルクへと向かった。わたしたちには、イロヴイスキイは古い荷馬車を都合してくれた。そしてカザークの護衛をつけて、フランス兵の捕虜の一団とともに、近くの町まで送ってくれた。彼はヤロスラーヴリまでの車馬賃もあたえてくれたし、全体として、戦時の繁忙と不安のなかで、できるかぎりのことをしてくれた。

これがわたしの最初のロシヤ旅行であった。二度目のときには、フランスの槍騎兵も、ウラルのカザークも、また捕虜もいないで——わたしはひとりであった。そしてわたしのかたわらには、ひとりの酔った憲兵が腰かけていた(2)。

わたしの父は、まっすぐにアラクチェーエフのところにつれて行かれ、彼の家にひきとめられた。伯爵は手紙の提示を求めたが、父はそれを自分でとどける約束をしたことを話した。伯爵は皇帝にたずねてみることを約し、そのあくる日、右の手紙をすぐに提出するためにうけとるように、皇帝が彼に委任した旨を書面でつげてきた。手紙をうけとって、彼は領収証を渡した(これもいまだに保存されている)。わたしの父は一カ月ほどアラクチェーエフの家に拘禁されていた。彼との面会はだれにも許されなかった。ただC・C・シシコーフが、皇帝の命によって、火事と敵軍の侵入との詳細、およびナポレオンとの会見について、いろいろとたずねるために訪れるだけだった。わたしの父はペテルブルクに現われた、最初の目撃者だったのである。ついにアラクチェーエフはわたしの父に対し、皇帝が彼を釈放するように命じたこと、また父が敵軍の司令部から通行許可証をもらったことはあえてとがめず、それは彼のおちいっていた窮状のせいであるとされたことをつげた。わたしの父を釈放するにあたって、アラクチェーエフは、特に訣別(けつべつ)を許された兄(3)以外のだれとも会わずに、すぐにペテルブルクを立ちのくように命じた。

夜半ごろヤロスラーヴリの小村について、父は百姓家(地主の家はこの村にはなかった)に泊まっているわたしたちを見いだした。わたしは窓の下のベンチの上に眠っていた。窓はしまりがわるく、雪がすきまから吹きこんで、ベンチの一部をおおい、またとけずに窓わくの上につもった。

すべてがはなはだしい困惑のなかにあった。とりわけわたしの母(4)がそうであった。父がつく数日まえの、ある朝のこと、所有地の村長と数名の下男が、母の泊まっていた百姓家のなかへ、あわただしくはいってきて、手まねで何かを示し、母にあとからついてくることを求めた。わたしの母はそのころロシヤ語はひとことも話せなかった。彼女はただパーヱル・イヴーノギッチの身に何か起きたのだということを理解した。彼女は何を考えたらよいのかわからなかった。彼女の脳裏には、人々が彼を殺したか、または殺そうとしている、そのあとで彼女もまた殺されるであろう、という考えがうかんだ。彼女はわたしをだきとって、生きたここちもなく、全身ふるえながら、村長のあとについて行った。ゴロフヴーストフは別の百姓家に泊まっていて、彼らはそこへはいって行った。事実老人はテーブルのそばに息たえてよこたわっていた。彼がテーブルにむかってひげをそろうとしていたときに、卒中の発作がいきなり彼の命を絶ったのである。

すすだらけの、小さな百姓家のなかで、あごひげをはやし、裸皮の外套を着て、まったくわからないことばを話す、これらの、なかば未開の人たちのあいだにおかれた、そのときの、わたしの母(彼女はそのころ十七歳であった)の立場は想像にかたくない。しかも、これらすべての出来事は一八一二年の、かのおそろしい冬の十一月のことであった。ゴロフヴーストフは彼女の唯一の頼りであったので、彼の死後、彼女は昼も夜も泣きくらした。だがこれらの未開の人たちは、そのすべての親切さとそのすべての素朴さとをもって、心から彼女をあわれんだ。村長は幾度かむすこを町へやって、彼女のために乾ぶどうや、香蜜菓子や、りんごや、輪形パンなどを買って来させたのである。

それから十五年ほどたっても、村長はまだ生きていて、ときどきモスクワへやってきた。頭

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com